



Title	アール・ブリュットのポスト・モダニティー : 芸術から福祉, そして福祉から芸術へ
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 140-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アール・ブリュットのポスト・モダニティー

—— 芸術から福祉，そして福祉から芸術へ ——

島先京一／成安造形大学

2010年3月24日より約1年間、パリ市立アル・サン・ピエール美術館において、「Art Brut Japonais 日本のアール・ブリュット」という展覧会が開催されている。アル・サン・ピエール美術館と日本のボーダーレス・アートミュージアム NO-MA、および滋賀県社会福祉事業団の協力によって開催されたこの展覧会は、63名の日本のアール・ブリュット作家の作品を紹介するもので、日仏両国において大きな注目を集めている。63名の出品作家の多くが、知的障がい者である。

しかしアール・ブリュットとは、知的障がい者による芸術表現を意味する言葉ではない。フランス語で「生の芸術（きのげいじゅつ）」を意味しているこの概念は、その簡潔かつ魅惑的な言葉の響ゆえに、多くの異なる理解を許容する包括性をもってしまったかにも見える。時には、素朴派と名づけてもいいような芸術表現や、民族芸術に対しても、この概念が援用されることがある。アール・ブリュットという言葉は、芸術に関心をもつ人びとの間で市民権を確立しつつあるように見えるが、しかしその概念に対する精査は、これからの課題として残されているというべきであろう。

この言葉の原点は、フランスの画家、ジャン・デュビュッフエ（1901-1985）による、特定の芸術作品の収集活動とその成果としてのコレクションにある。彼は、美術の専門教育を受けずに、自らの内的な自発性と自己の喜びのために密かに制作を行っている人びとの作品に、既存の芸術作品とは全く異なる芸術的な価値を見出し、1945年より積極的な収集活動を展開した。このコレクションは

紆余曲折の末、現在は、スイス、ローザンヌ市の「アール・ブリュット・コレクション」という名称の美術館となり、作品の保管、研究ならびに公開が行われている。

このような経緯を考えれば、私たちはジャン・デュビュッフエの言説の中にアール・ブリュットの定義の起源を求めるべきであるが、しかし本来画家である彼の言葉に論理的な厳密性や一貫性を求めることは難しい。デュビュッフエ自身はアール・ブリュットの何たるかを確信しながら、否定の繰り返しによる残余の消去と共通項を見出しにくい項目の列举という、入り組んだエクリチュールを用いて説明をせざるを得なかった。彼がアール・ブリュットを語るために断固として否定した要素を列記すれば、先にも記した美術の専門教育、現代の美術動向への関心、他者やその総体としての社会からの評価、そして文化全般への関心である。アール・ブリュットの作家は、これらの要素に対して一切の関りをもってはならないという。そしてさらに彼らの制作活動には、孤独で秘密の創造、燃え上がる精神的な緊張、限らない発明性、高められた陶酔、完全な自由、そして表現の純粋性といった要素が見出されなければならないとされる。これらの要件を満たし、デュビュッフエの探究心を満足させた作品には、知的障がい者による作品や精神病棟の入院患者による作品、そして霊媒や幻視者による作品が多く含まれていた。

アール・ブリュットの表現の多くは、既製の芸術表現に親しんでいる眼に対して、少なからぬ衝撃をもたらしてくれる。そしてその

衝撃には、常に新しい時代を切り開こうとする前衛的な表現がもたらしてくれる衝撃に共通する性格が含まれているのと同時に、いかなる先鋭的な理論をもってしても包括することのできない、不思議な魅力も含まれている。

何人かのアーティストは、ある特定の側面の正確さにこだわりをもったイメージを延々と画面上に繰り返して併置する表現を展開する。例えばヘルムートは、水泳競技会の様子を稚拙なタッチで描くが、彼はその場にいる人物を均質な密度ですべて描き出すのである。また本岡秀則は、何台もの電車のファサード(?)を一つの画面に詰め込んで表現するが、電車オタクである本岡にとって重要な意味をもつディテールは、ほとんど省略されないのである。彼らの繰り返しの手法はポップ・アート以降の現代美術の表現とも共通する。しかし彼らの特定の側面の正確さに対するこだわりは、平均的な感性しかもたないものの理解を超えており、私たちはその執念に圧倒され、その迫力の中に芸術的なカタルシスを認めざるを得ない。

また別のアーティストたちは、稚拙なタッチで人物を描きながら、何かそこに特別なメッセージが込められているかのような独特の表現を見せる。アロイーズは、上流階層の女性を独特の様式的な表現で描き出すが、そこには何か性的なメッセージが込められているように見える。小幡正雄が色鉛筆で段ボールに丁寧に、そして愛しむかのように描き出す家族の肖像にも、仄かな性的なメッセージが感じられる。その生涯において家族をもつことのなかった二人のアーティストが、男女の結びつきから始まる人間関係を描き続けたことは、人間性の最奥には、合理的な思考の侵入を拒絶する何かがあることを思わせ、興味深い。表現のきっかけや動機、あるいは内的な必然性について、全く想像すらできない

表現を展開するアーティストたちもいる。喜舎場盛也は、画面を漢字で埋め尽くすが、しかし彼の描く漢字は明らかに意味の媒体ではない。また戸来貴規は、彼自身にしか理解できない不思議な記号(文字?)で日記を書き綴っている。

何人かのアーティストたちは、明確な物語性をもった画面を展開するが、その物語の多くは私たちの常識を純真無垢かつ静かに挑発する。ヘンリー・ダーガーは、暴虐な大人の軍隊と闘い続ける不思議な美少女達の物語を密かに描き続けた。鱸万里絵は、鋭利な刃物と性器や内臓が絡み合う、グロテスクでエロティックな画面を描く。彼らの表現に一切の野心的な意図は込められていないことが明らかかなだけに、その挑発は私たちの観照に揺さぶりをかける。

そして、形と表現の根源を追求するアーティストたちもいる。舛次崇は身近なものをモチーフとしながら、彼の感性と知性、そして身体性の全てから、単純ではあるが力強い形象を絞り出す。澤田真一が陶芸の技法の中で創り出す不思議な生き物たちは、作者の精神に一点の曇りもないことを表すかのように、無垢に存在する。

アール・ブリュットは、平均者の常識的な理解を超える感性の回路を身につけた特別な才能の持ち主による、芸術表現であるということもできよう。それは、合理性を至高の徳とするモダニズムにゆさぶりをかけることによって、人間存在の多様性を語りかけてくるのである。